戦後６８年の想い

１　対象学年　中学1年生

２　ねらい

終戦から６８年が経ち、戦争を経験された方が少なくなってきた。戦争を経験された方がどんな思いをしてきたのかを今の子どもたちは少しでも知るべきだと考える。

今の子どもたちは、戦争についてほとんど知らない。大人でも戦争に対してあまり意識をしていないのが現代の世の中である。そこで、戦争の悲惨さを実体験にもとづき語っている「焼け跡に立つ虹」を資料として使い、身近な場所で起こった戦争の悲惨な様子を知ることで、子どもたちに戦争をより具体的にとらえさせたい。

また、戦争を知った上で、平和について考え、自分たちには何ができるのかを考えるとともに、自分たちの生活に置き換えたときに、どうしたら争いが起こらないようになるのかを考えさせたい。

３　準　備

読み物資料「焼け跡に立つ虹」、ワークシート

読み物資料「焼け跡に立つ虹」

電柱から血が　（Ｐ１６～Ｐ２０）

著・出版　愛知県教員組合

４　指導計画

時間配分	学習活動	指導上の留意点
１５分	1　「戦争」について考える。 ⑴　「戦争」と聞いて思い浮かぶものを発表する。 ・　日本がアメリカに負けた ・　殺し合い ・　原爆 ⑵　「電柱から血が」を読む。	○　戦争に関係するものを何でもいいので発表させる。 ○　思いつくままに発表させ、どんな意見も受け入れる。

	⑶　「戦争」のイメージを発表する。 ・　こわい ・　いけないこと ・　なんでするのか分からない	○　資料を読んで感じたことや自分が思う戦争のイメージを素直に出させる。 ○　資料を読む前と読んだ後の気持ちの変化を感じ取らせる。
３０分	2　「平和」について考える。 ⑴　筆者の伝えたかったことは何かを考え、発表する。 ・　戦争はおそろしい ・　二度とこんな体験したくない、させたくない ・　平和 ⑵　「平和」とは何かを考える。 ・　戦争がない ・　みんな仲良し ・　笑顔がある ⑶　どうしたら「平和」になるのかを考える。 ・　ケンカをしない ・　相手のことを考える ・　みんな笑顔	○　筆者は何を伝えたくてこの文章を書いたのかを考えさせる。 ○　文末を思い出させ、そこから何を願っているのかを考えさせる。 ○　グループをつくり、意見を交換させる。 ○　「戦争」と「平和」の対義語を考えさせる。 ○　「平和」とは何かをふまえて、どうすればその状態になるのかを考えさせる。 ○　どうしたら戦争がなくなるかを考えさせる。
５分	3　教員の話を聞き、本時の振り返りをする。 ⑴　教員の話を聞く。 ⑵　授業の感想を書く。	○　たくさんの人が平和を願って活動していることを知らせるために、原水禁広島大会やかたりべ学習会の話をする。

５　実践のまとめ

⑴　戦争について考える

はじめに、戦争について知っていることを発表させた。子どもたちからは、「核兵器」、「戦闘機」、「原爆ドーム」など知っている言葉がいくつか出てきた。しかし、具体的にどういうことが行われたのか、どんな状況だったのかということは知らなかった。

そこで、資料「電柱から血が」を読んだ後に、今度は戦争のイメージについて発表させた。そこでは、「死」、「こわい」、「パニックになる」、「食べ物がなくなる」など、戦争中のことを思い浮かべながら発表することができた。それは、今まで非現実的だった戦争が、栄や今池といったなじみのある地名が出てくる資料を読むことによって、身近に感じることができたからだと思う。

⑵　平和について考える

資料を読み、戦争の怖さや悲惨さを生徒が少し理解したところで、この筆者は何を伝えたくてこの文章を書いたのかを考えさせた。作品からだけではなく筆者の気持ちになって考えるようにさせた。その際、席が近い人と相談をしてもよいことにし、たくさんの意見が出るようにした。

＜筆者の伝えたかったことは何か＞
- 二度とこんな体験したくない、させたくない。
- 戦争はとても苦しくて悲しいものだ。
- 平和な世の中になってほしい。
- 戦争をしてもいいことはない。

【話し合いの場面】

筆者の考えをもとに、次は「平和」について考えた。子どもたちは、最初、戦争の反対としてとらえて世界のことを意識していたが、周りと話し合わせるなかで、徐々に身の回りのことを考え出すことができた。学級の自分、学校の自分、家庭での自分、身近なことに目をむけることで、平和がどんな状態かを幅広くとらえることができた。

＜「平和」とは何か＞
- 安心して暮らせる環境であること。争いがない。
- 核兵器などを使わなくても、問題を解決できること。
- 心地よい環境。みんながやりたいことをやれる日々が続くこと。
- 家族と話せることなども平和の一部だと思う。
- 友達の悪口とかを言わない。みんなが笑顔でいられる。

最後に、どうしたら「平和」になるのかを考えた。それまでの発問の中で、身近なことに目をむけていた子どもがいたので、平和のために自分たちができることを問いかけ、考えられるようにした。自分自身を見つめ直し、学級や家庭のことを考えて、これからの自分の生活をどのようにしていくかについてまで結び付けて考えることができた。

【授業の様子】

＜どうしたら「平和」になるのか＞

・戦争などの悪い手段で解決しようとするのではなく、お互いに意見を聞いて、お互いが笑顔でいられるようにすること。

・友達とけんかをしたときにすぐにたたいてしまうのではなく、よく考えてみる。人の悪口は言わない。

・感謝の気持ちはしっかりと伝える。

・さまざまなボランティアをする。少しずつでいいからみんなを笑顔にする。

６　成果と課題

授業の対象は、親も祖父母も戦争を知らない世代の子どもたちである。「焼け跡に立つ虹」は、戦争の様子が生々しく描かれており、子どもたちに戦争の悲惨さを伝えるにはとても効果的な資料だった。筆者の戦争に対する思いも分かりやすく書いてあるので、そこから子どもたちは「平和」について考えやすかった。

身近なことに目をむけて、「平和」という状態にするにはどうしたらよいのかを考え、これからの自分の生活や行動を見直すことができた。子どもたち一人ひとりが今回考えたようなことを心に置いて生活できれば、学級や学校、家庭や地域がより住みやすい場所になっていくことと思う。

しかし、早い段階で自分たちの身の回りのことの方へ話がすすんでいったので、世界の平和や現在でも起きている戦争などについて十分ふれられなかった。戦争についてほとんど知らず、他人事としてしか考えられていない子どもたちには、より戦争について知り、考えることが必要だと思う。そこで、実際に戦争を体験された方に話をしていただいたり、教員自身がもっと戦争について学び、伝えていったりすることが必要だと感じた。

今後も教員自身が平和を願う取り組みについて学び、それらを子どもたちに伝えることで、平和な世界を大切にしようという気持ちを育てていきたい。